View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by GLIM IR Institution Repository

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

論文題名

Rudyard Kipling and His Children's Literature

論文審査の要旨

キプリングは大英帝国主義賛美に子供たちを導くために、たとえば『ジャングル・ブック』(*Jungle Book*) などの児童むけの物語を書いたとされてきた。大英帝国が栄えた時代の英国の若い世代に支配者としての知識と知恵を与えるために彼の児童文学は書かれたという意見が主流であった。しかし大英帝国が過去のものとなった今では、ポストコロニアリズムの視点から彼の文学テキストの全体が再検討されてきた。エドワード・サイードに典型的にみられるポストコロニアル批評では、キプリングは英国による支配に好都合な「永遠の不変のインド」を表象した点で帝国主義的であるが、同時に読むに値する「文学」を産出したということが強調されている。言い換えれば「帝国主義イデオロギーの唱道者」としてのみ片づけることはもはやキプリングのテキストの曲解であるとされている。同時に冒険小説の系譜の中にキプリングのテキストを位置付ける試みも多数生み出されてきた。(ex: Joseph Bristow, *Empire's Boys* ,1991) しかし児童文学というジャンルに、キプリングのテキストの総体を位置付ける研究は、驚くことに皆無であった。

唯一の例外は 2010 年に刊行された Sue Walsh, *Kipling's Children's Literature* である。この研究書は 1984 年に出版されて児童文学研究に衝撃を与えた Jacqueline Rose, *The Case of Peter Pan* の衣鉢を部分的に継ぐものである。ローズの研究書は児童文学の概念それ自体を批判するラディカルな批評意識に貫かれた研究書であった。簡単に言えば、文化や社会によって汚染されていない純粋無垢な始原の存在を子供に投影する大人の欲望としての児童文学への疑義を投げかけた。Walsh の研究も大人の文学と子供の文学の自明とされている区分への疑義と批判を投げかけている。しかし Walsh はテキストと作者キプリングの人生（伝記と自伝）の相互関係を無視しているわけではない。一例をあげれば 7 歳で亡くなった長女ジョセフィーンの死（不在）と『なぜなぜ話』(*Just So Stories*) の往還関係を詳細に考察している。しかし同時に作品に作者の自伝を読み込むこと、つまり伝記的読解の危険性を Walsh は警告している。

藤松玲子氏のこの博士論文は「キプリングの児童文学の研究こそキプリングの文学の本質にせまるのに有効である」という信念に基づいて、主として実証的・伝記的読解の方法に依拠して書かれている。この方法は Walsh も指摘するように危険

性を内包しているとは言え、藤松氏は最近の批評動向にも注意を払いつつ、意欲的にそれらに言及して伝記的読解の不足を補っている。最近の批評理論が一貫して用いられているわけではないが、徹底した資料の収集と精査による実証と伝記的研究によって、いくつかの新たな発見をなし遂げている。それらの具体例は、以下の章ごとの紹介で触れたい。

藤松氏はイントロダクションにおいて、キプリングの児童文学を二種類に分類している。1.子供のための作品　2.子供を主人公とした作品である。１は子供を楽しませ、教育するもの　２はキプリング自身のインドと英国で過ごした子供時代を反映する子供たちを主人公にしたものである。1は彼自身の子供たちのために作られたものであり *Just So Stories* （1902、以下 *JSS* ）がその代表である。２は短編「めーめー、黒い羊さん」(‘ Baa, Baa, Black Sheep’)のような自伝的作品である。これら二種の児童文学を藤松氏は序において概観しているが、それは彼の伝記の年代順に沿っての記述である。ここでは作品の紹介が同時にキプリングの初期の伝記的背景に還元される記述となっている。一例をあげておこう。

水のようになじんだインドの子供時代の天国から引き離されて、英国で教育を受ける（５～６歳）（親は子供がインドの文化やチーチー英語に汚染される前にそのようにするのが伝統）ときにキプリングは後々に残る心の傷を負った。このような体験が下敷きになっている「子供を主人公にした作品」を藤松氏はふたつに分類している。ひとつは、このトラウマを憎悪をこめて書き留めている「めーめー、黒い羊さん」や「国王陛下」(‘ His Majesty the King’)のような短編、もうひとつは、もし自分（キプリング）がインドにとどまっていたならこのような活躍をする少年になったであろうという想定で書かれた「トッドの修正案」(‘ Tods’ Amendment’)『キム』(*Kim*)などである。アシス・ナンディ(Ashis Nandy)というインドの優れた批評家も同じ見方をしている。もう一点、藤松氏が注目しているのは、ボンベイの幼児時代に乳母や下男からインドの口承物語を幾度も聞かせられたこと、英国での子供時代に叔母たちにたくさんの物語を読み聞かせしてもらったことが、のちにキプリングの文学テキストの口承性（orality）に影響したという点である。キプリングの文学の口承性は、本論文の柱の一つであるので今後も取り上げられる。

第一章では『ジャングル・ブック』が論じられている。藤松氏はこの作品の誕生の経緯を自伝と伝記によって追跡している。アメリカのヴァーモントでの長女の誕生、キプリングが子供時代に読んだ「フリーメイソンのライオン」の童話、ハガードの『ナダ・ザ・リリー』というアフリカを舞台にしたオオカミの群れが人間を助ける話しに影響されたという伝記的読解の後に、藤松氏はアメリカの当時の出版事情に言及して、どのような作品がアメリカの雑誌に好まれたかという時代の趨勢を調べている。『ジャングル・ブック』の短編が掲載された『セント・ニコラス』は児童雑誌であり、マーク・トゥエインやシートンの作品を掲載した。そしてシートンとベイデン・ポーウェルは知己の間柄であり、彼らはアメリカでの「ボーイスカウト」の組織化に協力した。これはイギリスでのボーイスカウト運動でのキプリン

グとベイデン・ポーウェルとの関係とパラレルであること、アメリカの博物学者シートンの動物記は観察にもとづくリアリズムである。それに対して人間の言葉を話す『ジャングル・ブック』の動物は、フェアリーテイルあるいはファンタジーのジャンルに属すると藤松氏は指摘している。しかしキプリングがこの作品から説教臭さや道徳臭を排除したのは、アメリカの読者が、キプリングの言う「白人の責務」や善悪の峻別に無関心な土地柄だったから、アレゴリーの形式を採用したのだという指摘はもう少し考察が必要であろう。

本章では、「赤犬」のような殺戮集団、アウトローの存在の恐怖を描く「赤犬」（Red Dog）や主人公の少年モーグリを餌食にしようとするシーア・カーンという虎の登場する「トラ、トラ」（‘Tiger！Tiger!）を分析して、ジャングルの秩序を破壊する脅威を取り上げている。知恵ある者、勇気ある者たちの世界と対比されるこれらの脅威の存在が、この作品を一層生き生きとさせていると藤松氏は指摘するが、この指摘は説得的である。さらに藤松氏はキプリングの用いた資料も精査している。インターネットの現代では、かつて入手困難な資料も読むことが可能になった。氏はインドの動物誌『インドとセイロンの哺乳動物博物誌』（Calcutta,1884）を調べて、赤犬の群れの数は７～８頭であり、キプリングがそれを誇大に２００頭にして迫力を出していることを明らかにしている。「トラ、トラ」ではアメリカのアニメーション「ライオン・キング」との比較をおこなって、善悪二項対立がはっきりしている「ライオン・キング」に比べて『ジャングル・ブック』は法を順守するものと無法者の境界を曖昧にして、両義的にしている。シーア・カーンを殺したモーグリはジャングルの王になるのでなく、この短編の結末では、オオカミと人間の群れから受け入れられない、所属を失った存在となる。モーグリは人間にも動物にも所属すると同時に、どちらにも帰属しない彼の両義性をデリダの他者性の問題と関連付けて考察を試みている。

第二章ではキプリングの唯一の長編小説である『キム』(1901)が論じられる。『キム』の先行研究を概観するなかで、藤松氏は英国のインド統治の特徴を指摘しているハンナ・アーレントの『全体主義の起源』にも目配りをきかせている。ロシアと英国の諜報戦争（‘The Great Game’）を副筋とする『キム』も帝国主義的インド支配に加担するイデオロギーを内包するテキストとして指弾されてきた。藤松氏はこのような指弾は、この小説のポリフォニック（多声的）な側面を見落としている一面的評価であると指摘している。

この小説は英語で書かれているが、ヒンドゥー語やウルドゥー語のローマ字表記が多数使用されている。またそれらのインド諸語の英語への転移が頻繁に見られる。藤松氏は具体例として小説の冒頭でラホールの広場に置かれた大砲に跨る主人公キムを引用している。英語で引用すると’Who hold Zam-Zammah, that fire-breathing dragon, hold the Punjab’.である。’Zam-Zammah’はウルドゥー語で「火を吐くドラゴン」の意味であるが、シーク戦争に用いられた実在する大砲である。英語読者には意味不明でありながら、その響きの強さと異様さによって耳に

訴えかけるこのようなインド諸語をローマ字で織り込む技法が『キム』には多用されている。また藤松氏も参照している David H. Stewart はこの小説の四分の三は直接話法つまり会話体（語る声）で書かれていると指摘していることも意味深い。

煩瑣を厭わずもう一例をあげよう。主人公キムのフルネイムは 'Kimball O'Hara'であるが、この名前は彼がアイルランド人の血を引くことを示していることはむろんのこと、藤松氏によればヒンドゥー語では 'Kim'は「誘惑」の意味を持っているのでキムの人々（インド人もヨーロッパ人もふくむ）への魅惑者としての存在を暗示している。主人公キムはインド人にも、あるいは、女性にも変装しうる多面的存在であり、それが名前にすでに象徴されている。

キムのハイブリッド性については、すでに多くの論が書かれていて、これだけでは斬新さは無いのであるが、藤松氏の論文の優れている点は、サイードに代表されるこれまでのポストコロニアル批評を消化したうえで、インドの多言語社会とキムの多様性あるいは多声性の親和性に注目している点である。このように氏は、植民者と被植民者の間を往還して、仲介するリミナルな存在であるキムの位置づけを行っている。

声の文学としてキプリングのテキストを見る視点は本論文のかなめであり、その出発点は次章において詳しく論じられている。

第三章は藤松氏のキプリング論の出発点をなす育児と子供たちへの読み聞かせの体験に基づく *JSS* 論である。このお話のアンソロジーのもとになったのは、キプリングが自分の子供たちを相手になかば即興的に作ったおとぎ話であった。動物たちの形態の由来を面白おかしい空想話として聞かせる「ゾウの鼻が長いわけ」「クジラの喉が小さいわけ」から始まる物語は文字の読めない子供たちにむけて作られた声の文化に属する。アンソロジーの後半には「アルファベットができたわけ」と「手紙のはじまり」が収められているが、これは音声から文字へと向かう子供の成長過程を考慮していると藤松氏は指摘する。*JSS* の編成は声の文化であるパロールからエクリチュールへの移行を考慮してなされているとの指摘は新鮮である。これは藤松氏が子供たちを相手に *JSS* を日本語に訳して朗読する過程で気づいたことである。（余談になるが氏は *JSS* の日本初の全訳を刊行した。岩波少年文庫に収められている氏の日本語訳は音読すると実に大人も子供を楽しませる名訳である）

物語る行為は、単独者の思考の行為である近代的読書と根本的に異なって、発話者と聞き手の二者と共通の場（トポス）をうみだすことである。繰り返し、成句、韻律形式に載せやすい決まり文句の使用が記憶をたやすくし、大人と子供の共有する物語の磁場を生み出す。藤松氏はキプリングと彼の子供たちとのベッドタイム・ストーリーであった *JSS* にそのような語りの場の原型をみている。子供は繰り返し同じ話をせがむ、父親がまちがえると訂正させ、或は最初から語りなおさせる。このような物語の行為は無文字社会の口承文学の特徴に似ている。氏はそのことを確認するために Walter J. Ong の『声の文化と文字の文化』（*Orality and Literacy*,1982）を参照している。評者は、このキプリングの声の文化の流れ、朗

唱の文体が帝国主義時代の国民の気分と共鳴しあうことによって彼の人気が高まったのだと考えているが、藤松氏のこの論文によって、さらに確信を深めることができた。

第四章と第五章はともに *Puck of Pook's Hill* （1906）（邦訳『プークが丘の妖精パック』）と *Rewards and Fairies* （1910)を取り上げているので、まとめて概要を述べたい。これらの物語集は、キプリングの子供たちのために書かれた英国の歴史である。歴史と言っても史実を書いたものではなく、神話伝説と歴史物語の融合である。妖精や北欧神話の英雄トールなどを登場させて物語は展開する。

サセックスの中産階級の子供たち、ダンとユーナが野外で『真夏の夜の夢』を演じているところへ妖精のパックが現れる。パックは近隣に昔生きていた歴史上の人物たちを子供たちに紹介する。彼らには四世紀の百人隊長パルネシウスからノルマン人たち、１６世紀の石工まで含まれている。彼らは英国の国民神話を形成する物語を子供たちに語り聞かせる。散文と詩の組み合わせが効果を高めている。

このようにブリテン島におけるパクス・ロマーナからパクス・ブリタニカへの橋渡しの役目をする物語群がこのふたつの短編集のおもな企画である。藤松氏が最も注目するのは「技と狡智」（'craft and cunning'）である。氏は論文の中でキプリングのテキストの分析をしつつ、このふたつの単語の意味を考察する。それは争いを巧みに避けて、敵との融和を成し遂げ、平和を保つ技術と解釈される。たとえばノルマン征服時のブリトン人とノルマン人の戦いとその後の統治の局面でも技と狡智によって平和と融和がもたらされる。またインド統治にもこの技と狡智を発揮して、異民族の平和的統治を成し遂げる人物ストーキーについて（モデルはキプリングのパブリック・スクール時代の友人）論は及んでいる。読解が困難な難物と言われるキプリングの *Stalky & Co.*（1899）（邦訳『ストーキーとその仲間』）の解読の糸口を与える。

キプリングの文学の根底を一貫してつらぬく信念は正義と法の順守である。自然状態における人間は万人の万人に対する闘争の状態であると喝破したのはトマス・ホッブスであるが、このようなアナーキーな闘争の恐怖に対抗するために法の精神を体現した（とキプリングは理想化した）大英帝国を支持した。これらの二章で取り上げられる短編連作は、この大英帝国の法の理念を子供向けにアレンジした物語集である。

以上のことを藤松氏は説得的に論じているが、第四章におけるイギリスの妖精の変遷史の記述に紙幅を費やしすぎている憾みがある。評者には、キプリングの妖精を理解するためにはジェイムズ・バリの『ピーターパンとウェンディ』に登場するティンカー・ベルなどとの比較にとどめれば十分であると思われる。但し資料の徹底的調査によって新しい発見も詳述されている。それは「ディムチャーチの大脱出」（'Dymchurch flit'）である。藤松氏はキプリングの自伝が触れている、1844 年に出版された、イギリスの牧師による教訓的妖精譚のルーツを探索し、Chaucer から１８世紀の Richard Corbet の妖精の消滅を謳った詩へたどり、さらに最終的に

それが *PPH* と *R&F* に与えた決定的影響を論証している。Katherine Briggs の妖精研究を参照しているにしても、これは藤松氏の新発見である。

結論部はキプリングの児童文学が子供たちに与える知恵と安心感を述べている。また１９１０年以降のイギリスの未来、特に第一次大戦を予言したキプリングを時代の予言者として概括している。ここで児童文学批評の潮流を参照してキプリングの児童文学の特質をさらに明確にしてほしかった。Walsh を除いてこの分野の先駆的研究であると評価できるだけに結論部が貧弱に見える。

総括評価

この論文はこれまでキプリング研究者たちが軽視するか、正面から研究対象として重視してこなかった *JSS* や *PPH* 等が豊かに内包する文学世界に果敢に取り組んでいる。研究方法は伝記的読解と実証いう旧来の方法であるが、資料の渉猟によって明らかな成果をあげている。むろん問題点がないわけではない。以下にいくつか列挙する。１．第三章において *JSS* と落語との比較がなされているが、恣意的な感を免れない。日本語の七五調と英語の ‘meter’の比較関係は藤松氏の考えているように単純ではないだろう。２．キプリングの語りの声が帝国の吟遊詩人（bard）として評価された時代にラプソディクな彼の詩（verse）が大衆的なナショナリズム（ジンゴイズム）を掻き立てたと思われる。声の文化が共同体的な広がりを持った時場合のナショナリズムとの関係に考察があればさらに充実しただろう。（今後の課題として）。３．英国の同時代の児童文学のコンテキストにおけるキプリングの位置づけを明確にする結論部がほしかった。（例えば『不思議の国のアリス』や『ピーターパン』との比較）。また作品が出版年によって通時的に扱われているために、児童文学としての特質がやや見えにくくなっている。第三章の *JSS* 論からスタートした方が本論文の趣旨がより見えやすくなっただろう。４．先に言及した Sue Walsh の研究書は二回言及されるのみで、彼女の主張、その内容との角逐が見られないのは残念である。そのために先行研究とこの論文の位置づけが十分ではないとの指摘がなされた。

以上の不充分な点が審査担当者から指摘された。しかし日本のみならず欧米でも十分に研究されてこなかったキプリングの児童文学の特質のいくつかを明確にした本論文は価値ある研究結果を含んだ優れた論文であることは明らかであり、論文審査担当者３名は、学位申請者藤松玲子が、博士（英語英米文学）にふさわしい業績をあげたものと全員一致で判定した。

論文審査委員：　主査　橋　本　槇　矩　教授
吉　野　由　利　准教授
高　橋　和　久　特別非常勤講師
（東京大学教授）